

第2回「第6次ニセコ町総合計画策定審議会」議事録

日時	2023年6月15日(木) 18:00~20:00
場所	ニセコ町役場多目的ホール
参加者	委員：新井 和宏 (Zoom参加)、工藤 三智子、新谷 典子、瀬戸口 剛、 中江 綾、西澤 純、芳賀 修一、長谷川 博史、松田 裕子、 村上 敦、レナード トレーシー、若杉 清一 事務局：山本 契太 副町長 黒瀧 敏雄 企画環境課 課長 高田 伸次 企画環境課 経営企画係長 大野 百恵 企画環境課 経営企画係主査 吉田 智也 企画環境課 経営企画係主事 佐藤 栄一 一般社団法人北海道総合研究調査会 特別研究員 野邊 和沙 一般社団法人北海道総合研究調査会 調査部 研究員 ※ほか傍聴1名

1 開会

2 副町長挨拶

【山本副町長】

第1回では多方面からいろいろなご意見をいただいた。まとめていくのが楽しみでもある。本日もよろしくお願ひ致します。

3 事務局からの説明

【会長】

前回さまざまな意見をいただいたが、今日は意見を出し切りしたい。12年後のニセコ町のイメージはどのような形になったらいいか、皆さんに意見をいただきたい。そのため、どのようなキーワードを出していけるかをさまざまな角度からご意見をいただきたい。

資料4は、キーワード、文章、意見をまとめたものになる。これをたくさん出していきたい。下の方に第5次の項目を挙げているが、これに縛られるのではなく、第5次に関係するものと、関係しないような新しいイメージ、概念を積極的に出していただきたい。上に行けば行くほど、今回出てきた新しい意見になる。そのような観点からご意見をいただきたい。
事務局から資料の説明をお願いする。

①第6次総合計画アンケート結果概要

※事務局より説明 資料1 「広報ニセコ6月号」

②第5次総合計画の評価と第6次に盛り込むべき取り組み(役場担当課コメント入り)

※事務局より説明 資料2 「第5次総合計画の評価に対する各課コメント」

③2035年にむけた展望資料

※事務局より説明 資料3 「ニセコ町を取り巻く環境動向年表」

④ニセコ町の将来像とそれに向けてのキーワード

※会長より説明があり省略 資料4 「第1回審議会 論点とキーワード整理(案)」

⑤ワークショップに向けて論点整理

※事務局より説明 資料5 「第2回審議会でご議論いただきたい論点」

【会長】

資料についてのご質問・ご意見はあるか。

【委員】

資料3の2035年のニセコ町の人口推計について、もっと増えるのではないか。国内でも海外からでも相当ニセコ町に人が集まってきているので、もっと移住者が増えると思う。

【事務局】

人口ビジョンを作った時のデータ¹だが、何年か経ち、人口ビジョンの数値よりも実際には増加傾向となっている。人口ビジョンの数値よりも増えることはあり得る。

【会長】

自然増減と社会増減の今までの統計のトレンドで見て、その結果が出ているに過ぎない。今のよう社会増が増え続けるとなれば、何年後かにそれが反映される。その時には人口も今よりも上向きに出るだろう。

【委員】

前のトレンドを見ると変化が速いので、これからこうなるとは言い切れない。

【会長】

今増えている部分が推計として反映されるのはもう少し先になる。それが反映されれば、感覚的にはもっと増える。

4 議事

①2035年のニセコ町の将来像について

【会長】

12年後のニセコ町がどうあってほしいか、どうあるべきか含めてご意見をいただきたい。

【副会長】

会長には前回話をまとめていただいたが、会長のご意見を聞いてみたい。

【会長】

ニセコはよく通っているが、今のニセコは人口が増えて、いろいろな人が集まってきている。「住みやすい」ということは、永住できる環境だけでなく、短期で過ごせる環境も作れると思う。日本にはいろいろなまちがあるが、その多くは定住を前提にしてまちのビジョンを作る。「10年ニセコにいたい」といった人や「少し住んでみたい」といったもっと短期の人もあるかもしれない。そういう人たちがニセコで暮らせるような環境を考えるのもニセコならではのビジョンに

¹ 「第2期ニセコ町自治創生総合戦略」(令和2(2020)年4月)

なる。

その中で環境をいかに守るかがもう一つ重要な視点になる。いろいろなまちで成長管理というキーワードでやることがあるが、ただ増えるのではなく、成長をベースとするが、環境や海外の国でいえば食糧など、いろいろなものを守らなければならない。それを守りながら成長するにはどうすればいいか。成長管理がこれからニセコで大事な観点になる。是非そのようなこともご意見をいただきたい。

【委員】

第5次総合計画の議論を読んだ。そこでどういうまちにしたいかというしっかりとした議論がなされ、そこで交わされた議論は普遍的な内容であった。それは裏返すと一つは普遍的なものなので変わることはないということ。町民が思っていることを代弁して議論いただいた。もう一つはそれが今もあるということは、12年間でやってきたことが十分ではなかったということ。その振り返りをして、足りないものは何か、次にどう生かしていくかという観点でやらないと、同じ形で12年が過ぎてしまうのではないか。いい議論がなされていたので、それを踏襲しながら、時代で変わるものを具体的にどういう施策にするかが大事である。

【会長】

私も第5次総合計画の議論に参加したが、第5次は環境、第4次は国際をテーマとしたのは、その分野に大きな動きがあったのでそのようなテーマとなった。ニセコ町はここ数年で相当変化している。一局面だが、新幹線や高速道路などニセコ町を取り巻く環境が変わりつつある。今後どうすればいいのかを考える時には新しい視点が必要になってくる。

【委員】

2035年のまちがどうあってほしいか、自分自身のこととして考えたら、まずは健康で、安心・安全、災害の少ないまちで暮らせること。全国的にみてもニセコ近辺は災害が少ない。地震が少なく、もし災害があるとすれば羊蹄山の噴火や台風、水害が若干ある程度である。自分が健康で暮らせるとすると、環境が一番大事。環境なくして経済や観光、農業も成り立たない。以前には、水環境を守るため水源地保護に動いたことがある。人口が増えれば水の消費量も増える。今ある水をそのまま使っていて賄えるかどうかを考えなければならない。

【委員】

2035年のニセコ町がどうあってほしいかという、新しい開発や新しいことが生まれるときはマスタープランがあって、その計画の範囲で開発が進められているまちであってほしい。今のニセコ町は、準都市計画はあるが、都市計画がひけない。開発には雑種地や農地が転用されることもあり、開発が無秩序で行われている現状もある。何かの案件で事業説明会があった際、住民からは自分の家の前に建物が立つことがあるので、それに対して賛成・反対という意見にとどまっている。それを越えた高いレベル・抽象的なレベルでの意見、例えばこれだけ魅力的な自然環境があるので、ニセコとしてここは残したい、開発するのであればこのような順序で開発したいという議論がほしい。山の方でドライブをしていたら急に切り開かれて大きな建物が立っているということが、2035年のニセコ町ではないことを希望する。また、ニセコ町の上水道については、老朽化や水源などいろいろと課題があると聞いている。水道インフラ拡張だけではなく、更新も併せて計画的にやっていくことが大事。

【会長】

都市計画の考え方がそうである。将来的に人口が伸びている時に、場当たりに開発しないで、全体の総量規制をしながら広げるところは広げて、守るところは守るということを決めていく。どうやって決めるかも大事であるが、ニセコ町はそのベースすらない。その点は大事なことで、具体的などころに関係してくる。あとで議論を深めていきたい。

【委員】

12年後のニセコ町がどのようなまちであってほしいかは、農地の保護、雇用が保証されていること、環境がある程度保全されていること、中央からのある程度の独立、そういう部分が必然的に時代の流れで出てくると思っている。そのすべてで何が必要かという、中央からの独立なら町自体の税収の増加が必要。それは雇用の促進にもつながると思う。環境について、森林地に新たに新築住宅の建設や開発をする場合、町民の雇用につながるようなルールを作る。例えば、敷地面積に対して、何パーセントの森林を残すというルールを作る。開発には重機が入り、表土も取られてしまうので、敷地面積の分は会社で植林をして雇用を増やす。森林の保護は将来的に土砂崩れの災害を防いでくれるという側面がある。雇用につながり、森林に大きな開発をすれば大きなお金が入るので、それだけ負担してもらおうという視点があった方がいい。

農地の保護だが、例えば町自体で野菜等を育てて商品化をする。リタイアした農家の人の耕作放棄地で野菜を育て、それを加工する場所を別に作れば、町民の雇用が生まれ、町の税収になる仕組みがあると面白い。

【会長】

森林をどうやってコントロールするか。単に守るだけではなく、それをどうやってコントロールするかが大事な観点。独立という話があったが、ニセコ町の自主財源は何割になるか。

【副町長】

町の税収は3割弱、10億ほど。全歳出を合わせて60億を超えているので、町税は現状で6分の1程度あり、除雪費を含めて約6分の1を町の税金で賄っている。

【会長】

先ほど資料3の説明にあったが、過疎債が使えなくなると、逆にまちの自立につながる。

【委員】

2035年のニセコ町がどうなっているか、私たち20~40代の人が思うことは、若い人たち(20代、30代)が活発に活動していて、自分たちの夢がかなえられるようなまち、自己実現ができるまちであってほしい。今回も皆で12年後のことを考えているが、子育てをしている親としては、ニセコ町で生まれ育った子どもたちが12年後、今の高校生などがこの場でニセコ町のことを真剣に話し合っていることが理想。そのためにはまず子どもたちがニセコ町を愛してくれていることが必要。子育て世代の半分は移住者になるが、10~20年前は良かったという話をよく聞く。前回も挙げられた水環境の問題で、今年2月から4月は、自己水源を持っている民間の分譲地で9時から17時まで水の使用制限がされている地域もあった。そこで子育てしている人もいる。新幹線工事の関係で、近隣住民から井戸が枯れたという声が聞かれるなど、生活用水が足りていないのが現状。一方、高級別荘地では、芝生に一日中スプリンクラーで水まきがされている状況を見ると、住民としては昔の方が良かったというのは当然だと思う。子育て世代がそう思っているようでは、子どもたちに真のニセコ愛を育めない。

どうしたらニセコ町の未来を真剣に考えてくれる子どもたちを育てられるかを考えると、ニセ

コ町がどのような教育をするかが大事。資料3の全国版の予想図にもあるが、2040年には「現実空間と仮想空間を融合させた学校教育が実現」と漠然とあるが、その間が完全に抜けている。GIGAスクール構想やITを取り入れるところまでは、ニセコでも端末が配布されて子どもたちが具体的にITに触れる機会が生まれている。しかし、現実空間と仮想空間の融合までの間が抜けている部分が大事なところ。子どもたちの能力を示すのはIQ、CQ、EQの3種類がある。IQ（知能指数）は今後AIに取って代わられる可能性がある。是非ニセコ町の教育で力を入れてほしいのは、CQ（創造的指数）、EQ（共感指数）の2つ。Googleで検索すれば何でも答えが出てくる時代なので、子どもたちはすぐに解を見つけられるが、例えば「片山町長が悲しい時はいつですか」とAIに質問しても答えは出てこない。「私が何をしたいのか」という問いに対しては、決して答えが出てこない。情報が世の中にこれだけ溢れていても、世界に自分は一人であり、自分という人間がわかるのは自分だけになる。その問いの答えは自分で見つけるしかない。そういったことができる子どもたちを育てなければいけない。AIが苦手としていて人間にしかできないこと、ゼロから何かを生み出すことを重視した教育をすることが重要。臨機応変に問題を解決し、人との協働で何かを生み出すなど、そのようなことができる子どもたちが育てば、将来的にこの会議を開いた時に新たなことを考えていけるような未来があるのではないかと、乗り越えていけるのではないかと思う。

【会長】

私もChatGPT²にニセコの12年後を聞いたが、将来のことはわからないと言われた。我々が考えなければならないことは、自分たちで考えられる子どもを育てること。ニセコの高校生は卒業後にどれだけニセコにとどまるのか、帰ってくるのか。いろいろな人が外から入って来るが、ニセコの子どもは残っているのか。

【委員】

高校の時点で倶知安町や札幌市に行くのが現状である。ニセコ高校に行く子どもは少ないのが現状だが、現在ニセコ高校の改革を一生懸命行っているところ。

【会長】

北海道大学の卒業生の9割が東京に行く。是非北海道で活躍してほしい。子どもたちがニセコに残る、将来帰ってくるというシナリオをどうやって組むかを考えたい。

【委員】

今の話題は素晴らしい。適切な年齢がわからないが、子どもには道外や世界に出て行き、いろいろな経験をしてほしい。それを吸収してニセコに帰ってきてくれるのが理想的な形。

【会長】

ニセコで子どもも大人も体験できるのは大事。その体験の中の一つに、ニセコでないとできない、環境を使った体験を考えてみるといい。

【委員】

論点1を考えてきたが、どんなまちであってほしいかという、今と同じでいい。自分自身の人生に折り合いをつけてやってきたが、今が一番いい。不満だけだと元気は出ない。今が一番よく、誇りをもってやっているというところに、「欲をいえば」という点が2035年につながれば

² ChatGPT（Chat Generative Pre-trained Transformer）とは、アメリカのAI専門の研究機関であるOpenAI社が2022年11月に公開した、AIによる対話型のチャットサービスのこと。

いい。

これ以上悪くならなければいい。水の心配、子どもの将来の心配があるが、これからバランスや折り合いをつけてやっていけばいい。将来のニセコは多様性を受け入れ、多彩なもの、他のまちでやっていない自立したチャレンジ精神をもった元気なまちであるといい。人口問題で言うと、ニセコの人口は増えるかもしれないが、世界の潮流からすると人口は減る。ニセコが基準を示してほしいところだ。ウェルカムな人とノーサンキューな人を明確化させたほうが守れる。環境問題も教育問題も同様で、ルールが必要。ニセコ町独自のやり方でどう歩めるのか考える人たちとニセコで暮らしていきたい。

将来に不安を残したくないのは財政の問題。さまざまな叶えたい希望も基本的には財源が必要。自分たちで稼げるところは稼ぐと掲げるのもまちづくりになる。資料2の商工観光課の記載にあったが、域内経済の循環が空洞化して観光赤字になっているということを是正しなければならない。子どもや女性が活躍するまちになってほしいが、財源が必要。「皆で稼ごう」という視点が出てこないのが不安。

観光審議会では宿泊税の導入を検討している。宿泊税は倶知安町で先進的に実施し、2億稼いでいるが、2億稼ぐために必死にやっているところを学ぶべき。SDGsの精神だと、一人も反対者を出さないという議論に聞こえる時がある。やらなければいけない時にはやるということがいいまちを作るには絶対に必要。結果が良ければ皆仲良くやれる。決めることは決めて、いい結果を出すために必死になるまちになってほしい。一番は子どもと女性が活躍できるまち。このためにふるさと納税などお金を使ってほしい。宿泊税も環境のために使うなどの話もある。財源のことはビジョンの時にはそぐわないかもしれないが、理想の議論ばかりでもいけない。

【委員】

2035年に向けて、全体として重要なことはどういう形で持続可能性（サステナビリティ）を担保するかということ。環境、水、開発、経済、教育、女性活躍も同様。基本的にすべて持続可能になっていくために考えていくことが大事。経済については前回も話したが、国内外の所得格差が簡単に縮まることはないという認識を持つ必要がある。日本全体として人口が減少していく中で、ニセコ町は人口減にならないかもしれないが、高齢化自体は進んでいくので、ニセコ町が掲げている相互扶助というお互いがお互いを助ける仕組み、すなわち共助を作っていく。その仕組みの中で、町の中で循環するお金と、世界中から集まった高所得者がまちにいるので、そういう人たちからしっかりお金をもらうことが大事。ただ、温暖化は進んでいくので、スキーに依存する期間は短くなると思う。1次産業をどうするのか、農業をどう捉えていくかは重要なテーマ。そのために新規の産業創造ができる人材をまちで育成するのは先行投資としてやる必要がある。

今週月曜日に品川女子学院で、池上彰氏と私でお金に関する特別事業を行った。7月にテレビで放映される。学生たちから出てきた将来働くときのテーマはAI一色だった。AIに負けない仕事を学生たちがずっと考えている。その中で、AIが苦手な分野は共感である。こういったものをしっかり教育の中に入れるのはできると思う。今回池上氏とやった教育をニセコ町で取り入れられないか考えている。ふるさと納税もそうだが、関係人口と組み合わせながら、共助の仕組みをつくる。住んでいる・住んでいないに関係なく、インバウンドの人にしっかりとお金を落としてもらう仕組みを作っていく、地域内での新規産業を応援しないと本当の意味で「自治」が成り立たない。

【会長】

さきほども話題に出たが、域内経済を回すのは地方ではとても大事なこと。稼いでもどんどん域外に出て結局お金が残らない状況がどのまちでも発生している。域内で経済を回すことを共助という概念で回せないかというご示唆だと思うが、具体的なイメージ、ヒントがあればほしい。子育てやいろいろな観点から域外からのお金を回すステージになると思う。

【委員】

私たちが行っているのは、ふるさと納税で寄付した方々のお金・思いをニセコに集める形にしている。今年は集めたものを、地域経済を活性化させるために地域内、住民の方々に使っていくフェーズに入っていけると思う。地域通貨の良さは、域外ではお金が使えず域内で循環させることにある。地域経済においても、法定通貨の回転率、すなわち1万円を年に何回使うかを計算するとその回転率は0.39であるが、地域通貨でいうと6倍になる。期限があるお金を設定すると逆に使うことが増え、域内でお金が循環していく。その中で地域内の取引が増えていく状況を作らなければ、外に出ていくことで地域が疲弊してしまう、具体的には東京にほとんど持っていかれてしまう。地域内循環は地域経済において重要なこと。それは内外格差を是正するうえでも、インバウンドとニセコ町に住んでいる人の差を埋めていくうえでも重要な要素だと思う。

【委員】

地域通貨として日本でよく知られているのが、「木の駅プロジェクト」。これは森林を間伐してその木材を運び出して地域通貨で対価を得る。その地域通貨を地域の商店などで消費する。これは良い仕組みだと思うが、課題としては木材を伐採するのは男性が多いため、対象が男性ばかりとなり、そこだけの循環に留まる点である。

もう一つの事例として、京極町では地域通貨で何かできないかと考えている女性がいた。その方との議論で、一番原始的な地域通貨は子どもがお母さんに渡す肩たたき券。それを地域内で発展させて、例えば地域のおじいちゃん、おばあちゃんに肩たたきをすることで子どもが稼げる仕組みをつくり、それを子ども食堂などで使って循環させることができないかと考えていた。

【会長】

地域内で一番お金が回らないといけなのは、エネルギーである。日本はどのまちでも外に出ていく大きなものはエネルギー。その課題をどうするかということと、子ども食堂の話題が出たので、子ども食堂についてお話をお聞きしたい。

【委員】

今回の子ども食堂に関しては実験的にやっている。学校を終えて、ご両親が帰ってくるまでの時間に地域おこし協力隊の人たちが勉強会や遊びを兼ねて、夕方になったら皆で一緒にご飯を食べようという思い出作りをした。子どもの教育はいかに自然の中で遊ぶかが重要。それがニセコを愛するきっかけにもなるし、危険と安全を自分の体で体感する経験をしてほしい。

【会長】

ぜひそれを経済とつなげられたらいい。

【委員】

経済の話で思っていたのは、ニセコ周辺でビジネスをやりたいといっても、それがビジネスと言えるのが疑問。一番稼げる土曜日や日曜日でも休みの店が多い。以前から店をやってきた人は自分のために店を開いていて、お金が十分にあれば土日の営業はしないなど、ビジネスとは違う

と思う。お金が循環することをブロックしている。観光客が日曜日に来て開いていない、平日の夜は早い時間に飲食店が閉まっているということがある。発想が違うと思う。この問題をどうすればいいのか、どうアピールすればいいのか、考えないといけないと思う。

【委員】

農家なので農業の話しかわからないが、自分は50歳になって守りに入っている。若い人はいろいろなことに挑戦したいと思っているが、資金がないと挑戦できない。今は気候変動でブロッコリーやさつまいももニセコで作れるようになったが、投資や電気代がかかる。皆にやれとは言えないが、若い人たちはいい経験になる。どんどん新しいことに挑戦する、それを町に応援してもらいたい。ニセコから出ていった人がいろいろなことをやりたくて帰ってきて、それを応援する町にしたい。

移住者がたくさん入ってきて、元々の住民と仲良くできるように、水の問題なども解決しながらやっていく。そういうことが出来ればもっとにぎやかなまちになると思う。

【会長】

若い人の話題が出たが、ニセコ町は農業に限らず、起業しやすいところなのか。いろいろな人が入ってきて起業するチャンスがある。それを支援する環境を作っていくというのも、今までなかった観点だと思う。

【委員】

起業しやすい状況だと思う。起業して失敗しても、時給の高い仕事がある程度ある。人口5,000人程度の他の農村と比べるとチャレンジしやすい。失敗できるまち。就職している人もそこに捉われなくても、別の選択肢がある。私の周りは建設業界の関係者が多いが、従業員として雇うのは難しく、一人親方や起業をしてやっている人が多い。冬は除雪やスキーの仕事をやって、夏は大工をして、というようにいろいろな仕事をしている。ニセコらしい働き方の一つだと思う。

【会長】

北大でもスタートアップ支援をやろうとしているが、失敗したらどうするかが課題。ニセコが起業しやすいまちというのは大事なこと。だからこそニセコ町に人が集まる。

【副町長】

現在、ニセコ町では商工会に加入することを条件として、店舗を借りた時の改修費用として最大100万円を補助している。2021年の日本経済新聞³において、ニセコ町の新設法人の増加数が全国の町村で6位（北海道の町村で1位）と報道された。起業のハードルが低いかもしれない。

【会長】

起業しやすいということがニセコに帰りたくなる、ニセコが好きで活躍したいということにつながる。ビジネスだけでなく教育などいろいろなところに波及してくる。

【委員】

個人は起業しやすい環境だと思う。失敗を恐れずに何にでも挑戦できるので、自分自身に関してはチャレンジングである。しかし、今の若い人には町全体を良くしようという思いが欠けているように思う。

³ 「起業 6.6 万社で最多に 市区町村の 6 割で増、4~9 月」（日本経済新聞電子版、2021 年 11 月 13 日）〈<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO77542790T11C21A1MM8000/>〉（2023 年 6 月 23 日閲覧）

その要因の一つは町の教育の保守的な体制にあると思う。文科省が推進するコミュニティ・スクール⁴（以下、「CS」という。）が役場・学校・地域の役割として設置され、とてもよい仕組みだが、うまく動いていない現状がある。社会教育委員として活動している中でも常に課題に挙がり、さらに第5次総合計画にもCSを活発化することとなっているが、具体的に動くまでには至っていない。ボランティアスタッフに声がかかることもない。例えば毎年、小学校に進学した家庭にボランティアでできることを書いてもらっているが、「英語の面でサポートする」と書いても召集がかからないので、次の機会に書かなくなる。その悪循環で現在ボランティアスタッフは20名ほどしかいない。役場もCSを推進するといっているが、年々予算が減っている。学校自体もCSと距離を取ろうとしている。CSの委員となる保護者は熱い想いを持っていて、積極的に教育に関わりたいという人たちである。しかし、例えばCS委員が、アウトドアで山登りが大変ならエキスパートを連れてくると提案しても、学校側も役場側も消極的だと伺っている。数年前の教育長はCSの活用に積極的だったが、現教育長は教師の力や学校の力を信じたいと、CSの活用に消極的な姿勢である。そのような現状から具体的な動きになっていない。昨年中学校でイグルー作りをした際、子どもたちが喜んでくれ、CS委員も盛り上がったが、校長先生や教師としてはもっと学校の力を信じてほしいという気持ちだったのか、反応が良くなかった。そのためCS委員がすごく落ち込んでやる気がそがれていた。行政の人事の面で保守的な部分があると前に進んでいけない部分もあると思う。相互扶助がうまく成り立っていないと感じる。

【会長】

今の世の中の動きは、学校の部活をコミュニティに任せようとしている。ニセコは先行していろいろなことをやろうとしている。部活を学校の先生だけで行おうとすると大変なので、地域をよくわかっている人に任せようとしている。

【委員】

現状、ニセコ町にも少年団があるが、コーチやスタッフと子どもの人数がミスマッチとなっており、子どもへのケアが行き届いてない。コーチはほぼボランティアで行っている。クラブチームが倶知安町でできているのでそちらに流れている。ニセコ町でもスポーツの面で少年団のボランティアだけに頼らないクラブチームづくりをしないと、コーチや保護者の負担がかかる。元々自分の子供のためにコーチになり、子どもが卒業しても続けている人が多い。保護者の負担が減るようなサポートをしてもらいたい。

【委員】

起業しやすいまちで一人親方が多いというのはわかるが、どのような企業が増えているのか。

【副町長】

飲食関係が一番多い。

【委員】

新型コロナウイルスに関する補助金を申請する関係で何度か商工会に行ったが、個人では書類作りが難しい。そのため皆が商工会に入ったのではないかと推測していた。起業しやすいまちと言うが、飲食店が増えている割には夜の夕食の予約が冬はどこも取れない。倶知安町でも夕食難

⁴ コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）とは、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる「地域とともにある学校」への転換を図るための仕組み。学校運営に地域の声を積極的に生かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくことができる。

民がいると聞くが、ニセコはもっとひどい。起業が増えてまちが豊かになるかという、利益がぎりぎりなところで経営すると税金も町に入っていない。

【会長】

みなさんに将来の話をお伺いした。地域の中で経済を回していく、相互扶助を進めていく、将来のニセコを担う子どものための教育や環境に焦点を当てる、今ある環境を守ることと、開発のバランスをとる。そのようなご意見をいただいた。

【副会長】

相互扶助について、農家ではないから関係ない、子どもがいないからわからない、SDGsはわからない、というのではいけない。町民が共有できるシンプルなキャッチフレーズ、「ニセコ町＝○○」というものがあればいい。ニセコ町は世界一住みやすい町を目指すといいと思う。何が世界一かは一概に言えないが、一つの尺度として、例えばアメリカの企業 Asher & Lyric の指数では、①安全性、②幸福度（自由さ、自殺の低さ）、③子育てのコスト、④健康、⑤教育、⑥子どもと過ごす時間の6つのカテゴリーとなっている。このタイトルを掲げることによる一番のメリットは、町民の意識が変わること。世界一住みやすいまちの一員だと思ふことで、一人一人の意識が変わることからこの12年が始まると良いと思っている。SDGsは素晴らしいがよくわからない面がある。ニセコといえば、パウダースノーと外国人が多い、不動産が高いというイメージがある。観光客だけではなく、住みたい人を引き寄せ続ける魅力がなければいけない。何かあったら来なくなるような人たちをあてにはできない。雇用の安定しないまちは発展しづらい。いつも話題になっているまちがいい。先ほどの6つのカテゴリーの中でニセコ町が唯一欠けているのは教育だと思う。独自の教育と開発するたびにまちが豊かになる住民ファーストな開発。それによって自然と人に優しい企業の誘致ができて、ぜひたくを言えば医療が充実してほしい。

では具体的にどうしたらいいのか。教育が低いとまちの魅力が乏しくなる。国際結婚ファミリーの友人が、子どもが小学校3年生になったあたりで教育に不満を持ってニセコ町から出て行く。世界的なビジネスオーナーがたくさん来てビジネスを学べる機会があるのに、彼らはニセコ町に魅力を感じずに、別荘扱いにして出て行ってしまふ。移住者はフットワークが軽いので来るのも見切りをつけるのも早い。非常にもったいない。ではどんな教育が求められるかと言うと、学力だけでなく、日本一の公教育を目指す北海道安平町のようなわかりやすさがあると移住者を引き寄せるのではないかな。

ニセコ町の目玉商品は、例えば3か国語教育、シックスセンスの教育、瞑想やヨガを取り入れたマインドフルネスの教育をやるなどが考えられる。従来の教育だけで今話したような教育をカバーするのは難しい。インターナショナルスクールに通っている生徒が夏休みにニセコの小学校に来ていたが、ニセコ小の先生が英語対応できないからと受け入れを拒否されそうになった。インターナショナルを謳っているニセコ町の先生が小学生と英語で話せないとしたら、それは国際的なまちとは言えないのではないかな。2035年までには教育に特化した、町と民間で行う授業があってもいいし、教育のコンサルタントが入って従来の教育システムを変えていけたらいい。例えば子どもがニセコ町の未来を作るという教育も面白いのではないかな。大人の知恵を使って、子どもの描いた未来を実現する、子どもが想像した未来が形になるまち、これは最高の教育だと思う。その中でお金のことやコミュニケーションスキルを学んでいけるのは良いこと。言ったことを実現するのが大人の役割だと思っている。先日町内会で会った小学生が役場と意見交換の場があっ

て意見を言った。「その後、言った意見に対して何か返答はあったの？」と聞いたら、ただ「参考にします」と言われただけだった。参考にしてどうなったのか、何が変わったのかまで教えてもらわなければ、発言者に申し訳ない。意見に対して返答がみえる風通しの良いまち、意見が反映されるまちであってほしい。議員が少ないなど、まちづくりに興味を持ってもらえない理由の一つに、言っても変わらないということもあると思う。子どもたちが世界一住みやすいまちをつくるという意識を持てるような教育を行う。

もう一つは環境。町の発展と環境の保全是水と油の関係にある。止めることはできないので、住民ファーストの開発として開発するごとにまちが豊かになるシステムを作るよう、今すぐ手を打たないと間に合わない。2035年はニセコでビジネスをしている人、開発をした人は自然に対する感度が高く、ホスピタリティがあって、ハードルが高いところでビジネスができていることが評価されるような、そんなブランド力があるようなまちになってほしい。あとは開発税のこと。宿泊税だけでも通らないのに開発税なんてという話もあるが、ホテルができればプールが使える、レストランに行ける、公園が使えるという開発だけではないので、そのような開発ではない時には開発税をもらい、プールを直したり、図書館を増やしたり、まちが豊かになっていくと良い企業を誘致してブランディングできる。ニセコ町は2035年に世界一住みやすいまちになるポテンシャルがあると思う。

【会長】

実現するためにどうすればいいかは次回も引き続き話をしたい。

何点か議論の中でキーワードが出てきたので、それに関連して話をしてほしい。

【委員】

論点2将来像を実現するために必要なことについてだが、誰に向かってメッセージを出すべきかが重要。住民の方々にどうメッセージすれば響くかが将来像を実現するために大事なこと。一つは若い人達が希望を持てることが大事であり、私たちができれば場所・チャンスを作り、やりたいと思う人を徹底的に応援していい結果を出してあげる。いい結果が出ると必ず仲良くなる。けんかをしている時は結果が出ていない時。大人はけんかになると仲直りできない。誰のための計画なのか、住民に対してどう響くかを考えなければならない。

税制的な確保は必死になってやるべきだと思う。宿泊税はどんなことがあっても導入すべき。すぐにでもやれる流れにあるのに止める方向に動けば、ニセコ町の2035年はない。いただけるものはどうやっていただくか、必死に自分たちで考えなければならない。黙っていて何かが手に入ることはない。共助というが、自分たち自身で頑張れることがいいまちを作ること。

前回シェアをワードに入れたが、これは共有である。コストをどう下げるかも大事だし、共感するのも大事。ここで大事なのは、ニセコ町の情報が良くも悪くも共有されているかどうかにある。どこかに情報が偏り吹き溜まると疑心暗鬼になり、共感・共有できない。人を助けようと思えないし、自分さえ良ければいいという関係になる。そのような関係にならないために何が必要かという、共有できる場所・機関、プラットフォームが必要。必要な時に必要な人と共有できるようにしなければいけない。共助もそうだが「ともに」が実現するために何が必要かを考える。

今引退馬の仕事をしている。日本中央競馬会（JRA）を卒業していく馬が毎年8千頭もいる。この馬を活用しないといけない。今まで動物を扱って巨額なビジネスをしてきたが、一方で引退後は殺処分されるなど虐待ではないかと指摘されており、引退馬を養老する場所をたくさん作って

いる。ある島では養老牧場を作り、留学生を全国募集して小学校を成立させている。その島では地元の子どもがいなくなったため小学校が廃校の危機になっていたところ、他所から来てもらい、全寮制にして教育をすることから始めた。そこでは親元から離れ、動物と触れ合う、命を大事にする、助け合うということを学べる。疲弊して消えていく寸前のものにチャンスがある。ありものを上手に共有すると違う価値が生まれる。

【会長】

これまで委員の皆さんにそれぞれの立場でいろいろな意見をいただいているが、話を積み上げていきたい。それが将来像の実現につながっていくのではないか。そのための入口が環境や教育などである。つながっていくようなご意見をいただきたい。

【委員】

今の状況が良くて今の状況を変えてはいけない部分、例えば既存のインフラのこれは変えない、安全な水や森林、自然を守り続ける必要があるなど。一方で、大胆に変えなければならない部分の2面があると思う。変えないところと変えるところが何なのかは議論を積み上げていくときに整理する必要がある。2回目の審議の段階で整理するのが正しいかどうかはわからないが、整理することは大事である。新しいことを始めないといけない、変えなければならない部分に関しては、若い子どもたちをどう育てていくかという部分がこれまでの委員の発言も多い。これについては、何か新しいアイデアを総合計画の論点の中で切り込んでいく必要がある。特に総合計画の策定に参加する人の最低3割は若い人たちでなければならないなどと規定することで、若い人たちの意見を聞かなければ新しい方向に変えることができないようにしてはどうか。そうでなければ、第5次と質的に議論が変わらず留まってしまう恐れがある。

【会長】

高校生にも意見を聞く機会があるか。

【事務局】

今回は子ども向けワークショップを小学生～高校生まで対象を広げて意見を聞く予定である。

【会長】

ぜひまたその意見をフィードバックしてほしい。あるいは高校生にはこちらの審議会に参加してもらおう。

【委員】

高校生の農業クラブの会長、生徒会長が審議会に参加できればいい。

【事務局】

高校と相談してみようと思う。

【委員】

今の議論のように未来を描き、それを実現するための方策を考えることは大事。その一方で現実として町民が感じている不安や課題を解決する道も示さないと、町民の期待には応えられないと思う。例えば、アンケートの結果で評価の低い項目は住民が不安に感じていることだと思うが、それに対する役場各課の回答を見ると意識がずれていると感じる。この先どのようにしていくかはこれから作り上げていくものだと思うが、課ごとでやっているところになると感じた。具体的には、資料3のP2のまちづくりについて、「ニセコミライ」は、第1、第2工区完成～整備完了と記載があるが、そもそも「ニセコミライ」の目的が抜けている。住民がいろいろな議論を

した中で、まちづくりについてこれからのことを考えた時には、コンパクトシティを目指し、高断熱・高気密で省エネな家を増やすことで環境を良くし、引いてはエネルギーについても考えるというような議論があった。また、ニセコでは住宅難で若い人が入ってこない状況があり、それをどう解決するかも株式会社ニセコまちと一緒に議論した。それらの解決方法は、ニセコまちがリーディングカンパニーとして町全体で実現しなければならない。課題を解決していく視点が見えてこない、積み上げにならない。

【会長】

住民の意見に対して、資料2の各課の今後の実施方針と資料3の年表にある実施予定の事業が繋がっていない。先ほど医療や教育の問題も出ていたが、それに対して年表がどこで応えているかが見えてくると、課題に対して将来に何をしようとしているかが見えてくる。

変わらないことは、一つが環境の問題。変わることは、起業、新しい人がどう参画できるかということ。

【委員】

大切に残していきたいものが何かは明確にワードとして残した方がいい。大切なものについて変えていけないという明確な方向性と、変えていけないことに価値を見出すのは教育。自然に触れることも大事だし、相互扶助という考え方を体感できる状況を作っていくことが大事になる。その軸がある中で、経済をどうやって回していくのか。自分たちが時代に応じて変わっていくという観点で、AIもそうだが、自分たちがどうAIに向き合いながら、どういう仕事をデザインしていくのか、地域の将来に対してしっかりと描いていく必要がある。変わっていかないことを中心軸に据えて、そして変えていくということが大事だと感じた。

【委員】

維持していきたいものはこのままで、これ以上大自然を壊すことがないようにしたい。良い企業が来て、良い移住者が来て、ルールを守らないといけなくなるようにする。良いルールを作ることを至急やらないといけない。目の前で大自然がなくなっているから、今すぐ作らないと手遅れになるかもしれない。

【委員】

40年くらい前から環境を守るべきだと活動してきた。ニセコが魅力的だから移り住み、この環境を守りたいと思っている。水環境も移住してきた時はあってあたりまえだった。人が増えることで、湧水があるところまで売買されてしまうという危機感を持った。森林保護をするためのルール作り、環境を守るためのしっかりとしたマスタープランを立ててほしい。ニセコ町全体の開発する場所、守るべき場所、農地として残すべき場所といった区分けを早く作ってほしい。第6次総合計画に取り入れてほしい。

【会長】

例えば第6次総合計画の中にマスタープランを作るべきと入れて、実際に作る作業を動かしていくということも可能だと思う。

以前は町の景観を保護する法律がなかった。いろいろなまちが景観条例を作り、それが全国に広がることで、国でも景観を守る法律ができた。自分たちで動くことが大事。もし皆さんの賛同が得られるなら、そのようなことも検討したい。

【委員】

前回、医療も大変だという話をしたが、倶知安厚生病院を維持できない可能性がある。お金だけでは解決できない問題もあり、データ分析が必要としていたので補足させていただく。

ニセコ町以外は人口減少により人手不足があらゆる分野で深刻な問題になっている。先日函館市では、プールのない学校の児童を近隣校に移動させる送迎用バスの運転手が確保できないため、すべての市立小学校で今年度のプール授業が中止となった。バスに乗れずプールを使えない子どもたちが出ることから、教育の公平性を保つために、プールを持っている学校でも使用しないこととなった。そのくらいバスの運転手がない、タクシー運転手がない、除雪の作業員もいない。医療に関しては病院でいろいろな人が働いており、看護師や医師、管理栄養士、調理師、理学療法士など、さまざま職種が自転車操業となっている。ニセコ町だけ人が増えても、周りの町で人手不足になったら維持できない。そういうお金だけでは解決できない深刻な問題がある。プライマリ・ケア（総合診療）とリモート診療も含めたネットワークの医療をどう構築していくかを真剣に検討しないと、町民が求める安心・安全な医療体制が実現できない。

【会長】

医療の問題はどの市町村でも同じような問題が起こっていて深刻である。

【副町長】

人口減少で維持できなくなる可能性は確かにある。

【委員】

ニセコ町でも特別養護老人ホームニセコハイツは人の確保の面で自転車操業になっていると耳にする。人がみつからないという地域課題がある。

【副会長】

副町長は2035年にニセコ町がどうなっていてほしいと思うか。

【副町長】

守るべきものと開発すべきものの2つに分かれたというのは、皆さんの想いと同じである。ただし、誰も入ってこない、あるいは誰も出て行かないということは、イコール衰退だと思っている。適正な開発があってしかるべきで、バランスが重要になる。何をもってこのまちの魅力が欠けてしまうか、欠けないのかを皆さんと議論したい。偏見かもしれないが、私は何代にもわたってニセコ町民であり、そのような大昔の農家ばかりのニセコ町を知っている人たちはそこまで開発が嫌でもないところがある。その辺の折り合いが見えるように、納得感を持ちたい。何でも駄目、何でも良いということではないと思う。

【委員】

変えていかなければならないところと変えてはいけないところについて、早急に変えてほしいのは英語教育である。教育の部分では英語教育の強化が住民アンケートで第1位となっているが、実際に活きた英語を取り入れた教育は行われていない。倶知安町の教育行政執行方針を見たが、SMiLE Niseko Language School 合同会社に依頼してオールイングリッシュの授業が行われており、小学校の英語教育の委託料だけで約2,700万円を投じている。資金がなくて難しいなら、CSの活用や地域通貨の活用につながると思うが、英語が話せる人がこれだけ町内にいるので、合同会社を作り、そこに委託することは早急に変えられる内容ではないか。北海道赤平市の町工場でロケット開発している植松氏が、学問は社会課題を解決するために人類が生み出したもので、教育は死に至らない失敗を安全に経験させるものだと話していた。ニセコ町の大人が率先して失敗

を恐れなくて新しい教育を実践してほしい。審議会も若い人の声を吸い上げ、弱者の意見を入れるられるようアウトソーシングし、第三者にファシリテートしてもらいながらワークショップを開催してもらいたい。

【事務局】

大人向けのワークショップは2023年7月13日に開催することが決定した。しかし、今の話はこのような場に来れない人の意見をどう生かすかということなので、今後検討したい。

【会長】

今日は環境、教育、地域ビジネス、起業、変わるもの・変わらないものなど、いくつかのキーワードをいただいた。これらを整理して、次はそのキーワードをうまくつなげていくような話を皆さんと進めていきたいと思う。一つのトピックからつながり、大きなビジョンにしたい。

【委員】

皆さんが教育についてとても良い話をされていて共感するが、今の子どもたちは忙しくて授業が詰まっている。さらに新たな英語教育を行う時間を作るには、国の学習指導要領とは異なるニセコ町独自のカリキュラムを作り、英語教育の時間に充てられるかどうかによると思う。

環境について、山に行くと緑の中に白い建物が群立していて違和感がある。数名の方が反対運動を熱心にされていたが、行政に言っても企業任せで何も変わらなかった。建物を作る時は2メートルくらい木を残すなどの配慮があってほしい。

【会長】

具体的なルールをどう作るかは次の段階だが、「ルールが必要」というところから始める。

③次回の審議会

【事務局】

次回の第3回審議会は9月下旬～10月上旬で実施する。

【会長】

次回も本日のような有意義な議論がしたい。本日はありがとうございました。

5 閉会

以上